

なることを明示するものなりと曰ふべし、されば此の戦の後薛延陀の勢は甚だ盛にして、其の部長夷男に就きて、唐書薛延陀傳に「於是諸姓多叛頡利歸之者、共推爲主、夷男不敢當」と記せるが如く、自ら附近諸部の雄長となり、回鶻も亦之に附するに至れり、殊に貞觀三年太宗が頡利を圖り、之が爲に夷男を懷柔せんとし、使を遣して眞珠毗伽可汗に冊するや、其の勢益々盛にして「於是回紇等諸部莫不伏屬」と記さる、其の後貞觀十五年太宗が突厥の李思摩を以て可汗とし、頡利の舊部落を統べしむるや、薛延陀に書を與へ「舉碛以北、延陀主之、其南突厥保之、各守境而無相鈔犯、有負約、我以兵誅之」と諭ししが、薛延陀は之に従はず、同年十一月「癸酉薛延陀以同羅僕骨廻紇靺鞨靺之衆、度漠屯白道川」と見ゆ、されば當時に於ても薛延陀は漠北の雄長として回鶻以下の諸部を統べしものなること疑ふ可らず、然れども回鶻の勢力も必ずしも薛延陀に比して甚しく劣りたるには非ずして寧ろ之と比肩するに足るものありしが如く、「突厥已亡、惟回紇與薛延陀爲最雄彊」、又「貞觀中擒降突厥頡利等可汗之後、北虜唯菩薩薛延陀爲盛」と見ゆ、唯だ其の雄長としての位置が薛延陀に在りて、回鶻は優勢なる一部として、其の下に附したるものなるは争ふ可らず。

回鶻と唐との間に於る交渉も、亦菩薩の時貞觀三年（六二九年）に初めて生ぜしが如く、唐書回鶻傳には此の年「始來朝獻方物」と記せり、此の事實につきて他の記録を参照するに、冊府元龜^{卷九}朝貢篇には、此の年「拔野古・僕骨・内同羅・奚等渠帥並來朝」と見え、唐書拔野古傳にも「貞觀三年與僕骨・同羅・奚・靺鞨同入朝」と記せども、回鶻の入朝に及ばず、通鑑も亦全く冊府元龜と同様の記事を載せたり、舊唐書廻紇傳には、前述の如く突厥の頡利可汗の唐に降りし後、唯だ菩薩と薛延陀とのみが盛なりし旨を記し、其の續きに「太宗冊北突厥莫賀咄爲可